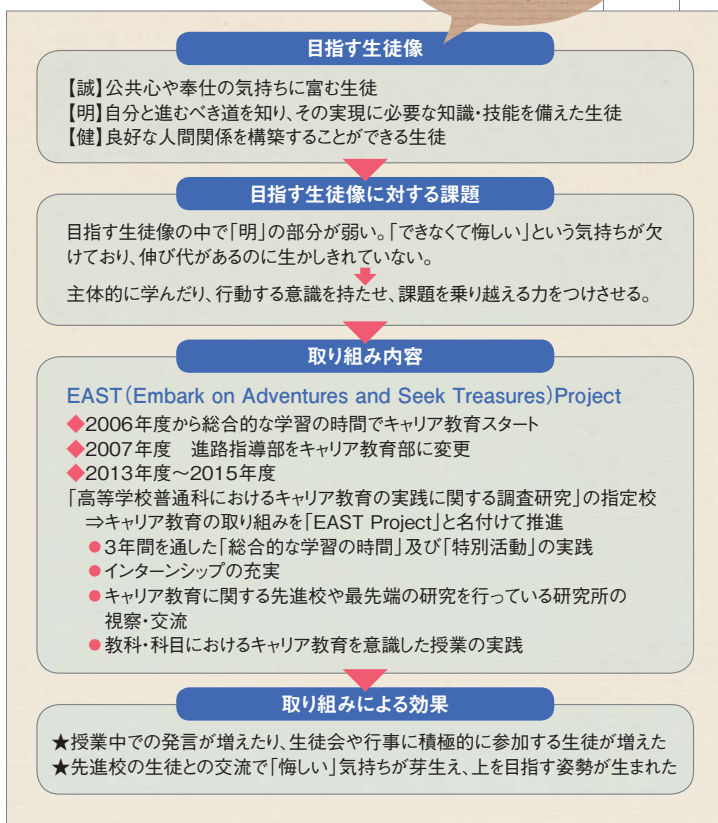


挑戦と失敗経験との繰り返し

生徒の自主的な学び・行動を引き出し

自己肯定感や自尊感情を育む

太田東高校の取り組み



生徒の伸び代を生かすため キャリア教育を強化

太田東高校の天田校長は、自校の生徒の課題について次のように語る。

「当校の生徒はとても素直で誠実。男女とも学校生活を楽しんでいますが、自分の能力をもっと高めようという活力に欠けていたり、伸び代があるのに生かされていないと感じていました」

「自分をもっとできる」という自尊心や自らの存在価値を高めさせるには、学校教育全体の中で一貫した目標を持った取り組みが必要と考えた。当校は2006年からキャリア教育に着手し、総合的な学習の時間(以下「総学」)を『みらい学』と称して取り組んできました。生徒が将来のステップを考える基礎力はついてきましたが、それだけではまだ弱い。総学で得た力を教科に結びつけてこそ、生徒の自信やさらなる成長につながると思い、文部科学省の「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」に手を挙げ、2013年度から3力年の指定を受け、『EAST Project』と名付けて幅広い



キャリア教育部
井上俊恵先生



進路指導主事
キャリア教育部長
野口裕之先生



教頭
吉井靖明先生



校長
天田比呂志先生

学校data

1982年創立／普通科／生徒数842人(男子394人・女子448人)／進路状況(2014年度実績)大学225人・短大7人・専修その他33人・進学準備10人・就職1人
★文部科学省「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」平成25年度指定校(3年間)

教科授業にキャリア教育を 組み込むアプローチ

「公開みらい学」以外でも、外部の人

取り組みをスタートさせました(図1)。(天田校長)

プロジェクトは野口先生、井上先生を中心とするキャリア教育部が推進。2010年から実施していた「公開みらい学」を取り組みの中核としている。日本労働組合総連合会や同窓会に声をかけて社団法人を招き、1学年は質疑応答式の座談会、2学年はグループディスカッションを行う。今年も70名もの社会人が来校。両学年とも生徒4人に1人の社会人が入った。社会で活躍する人と話すことで生徒が自分の20年後の姿をイメージでき、司会を生徒が務めることで、ファシリテーターとしてのスキルもアップしている。

「今年の『公開みらい学』でよかったのは、テーマを仕事に限定せずに家庭や生活のことも話していただいたことです。生徒たちが自分の育った家庭とは違うさまざまな人生観や社会について触れることができ、さらに視野が広がったと思います」(吉井教頭)

との関わりから生徒に変化が生まれたのが京都研修だ。先生たちは、日頃の授業で生徒が「できなくて悔しい」と感じておらず、そこそこで満足していることに課題を感じていた。昨年、生徒代表がキャリア教育の先進校でもある京都の立命館宇治高校の授業に参加した際、同校生徒のコミュニケーション力や学習意欲の高さに触れショックを受けていたという。研修後に生徒会に参加する生徒が増えるなど、研修で悔しさや向上心が生まれたと井上先生は見ている。

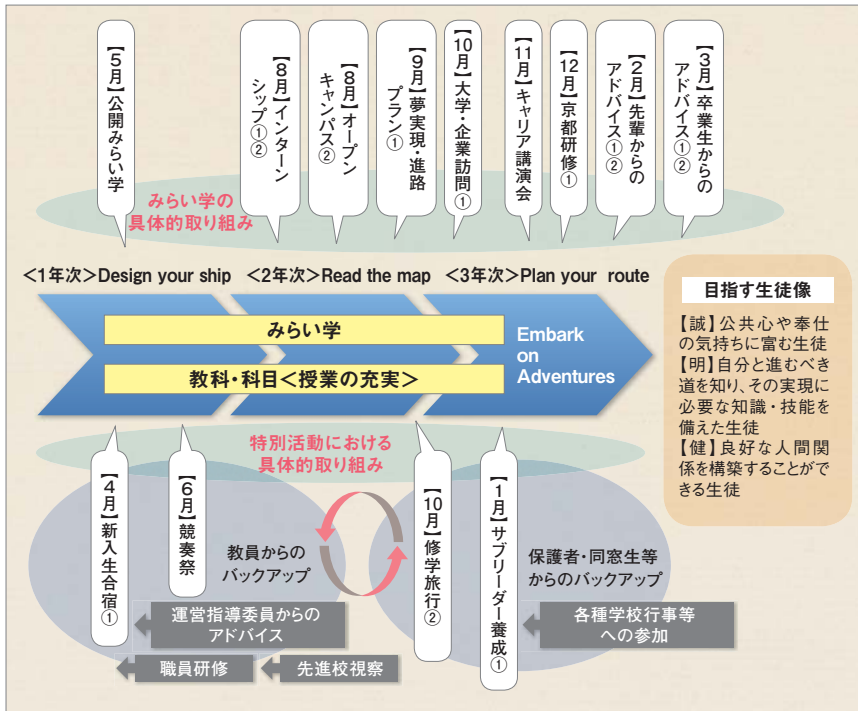
一方で、総学以外の教科授業をキャリア教育と結びつけることに、現場では必

要性や方法についてさまざまな葛藤があったという。井上先生が公開授業を担うことになった際に、英語科教員全員で協力して、生徒の能動性や主体性を引き出すAL(アクティブラーニング)型授業に挑戦した。

「当初は正直やらされ感がありました。が、同じ悩みを抱えた他教科の先生方と教科を超えた連携ができました。その中で、生徒にやる気を出させるためのアプローチは多様であることに気づけ、キャリア教育と教科の連携に意味があると思えたのです」(井上先生)

生徒のための取り組みを考える過程

図1 太田東高校の「EAST Project」の概要(2015年度)



保護者に公開する目的の「公開みらい学」。保護者がディスカッションに入ることもあるそうだ

公開みらい学



生徒4人ずつのグループに社会人が1名参加し、仕事、家庭、生活などさまざまな内容をディスカッション

公開授業

文部科学省の指定校として行った公開授業。野口先生は総学で企業の組織図を書かせ、教科とのつながりを気づかせる授業を行った



京都研修



28名の生徒が京都の立命館宇治高校で授業に参加。キャリア教育先進校の生徒から多くの刺激を受けた

競奏祭



生徒たちが授業時間を1時間もらって行った、全体練習の様子



競奏祭当日。当初反対していた生徒たちも、自分で企画したつもりで意欲的に取り組み大成功

意志を貫くことで自主性が、失敗から次に生かす力が

生徒に変化が生まれたもうひとつの大きな事例が、今年初めて行った「競奏

で、先生方の自尊感情が高まっていった。「自己肯定感」は失敗や悔しき、自己否定などさまざまな積み重ねから湧き上がるものです。失敗しても教員が新たな取り組みにチャレンジすることが、生徒の成長に必ずつながるのです(天田校長)

祭」だ。学校の一大イベントである体育祭を、天田校長が今年には合唱祭に変えたいと提案した。体育祭で応援合戦をやりたい生徒も、体育祭よりも準備がかり授業がつぶれることを懸念した教員も、ほとんどが反対。しかし校長は揺るがない。そこで、小規模な体育祭を1日と、合唱祭と応援合戦を合体させた「競奏祭」を1日の2日間で行うことを生徒が提案した。やると決まれば最高のパフォーマンスをしたい生徒たち。授業の時

Editor's Eye

新しい試みが教員と生徒の自信に繋がる

天田校長が2013年に赴任する以前からキャリア教育が進んでいた同校だが、校長の赴任以降活動が活発化している。井上先生が「校長が担任で我々教員が生徒のクラスのように」と語るように、校長はさまざまな新しいハードルを教員に課している。先生たちはそのお題に取り組み、結果として生徒にも新しいチャレンジをさせて自主性や自尊感情が生まれていった。その過程で先生たち自身の視野が広がり自信となっている。教員自身の自尊感情なくして生徒には身につかないのかもしれない。

間をもう1時間練習にももらえないかと、校長に直談判した。それこそが実は校長の意図するところだった。「生徒が自主的に何かをしたいと思ったときに、どう働きかければ大人を動かせるのかを学んでほしかったのです。最初にみんなが反対の意思表示をしたこともうれしかったですね(天田校長)」

結果的に、競奏祭は大成功に終わる。最初に反対していた生徒たちが、意志を貫いて折衷案を導き出し、折り合う工夫をすることによって、「自分たちが作り、成功させた競奏祭」へと意識が変化し、自信と達成感を得るにいたった。

「受験で失敗をさせるわけにはいかないため、日頃の授業や学校行事で失敗も経験させて、それを次に活かす力を養う必要があります。自己肯定感や自尊感情はこの繰り返しの中から生まれるのではないのでしょうか(天田校長)」